Osaka University Knowledge Archive

Title	第II編　言語コミュニケーション／第2章　認知言語学
Author(s)	井元, 秀剛
Citation	
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/57762
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

第2章　認知言語学

井元　秀剛

1．認知言語学の誕生

言語学には生の言語データをあつかう記述的な側面と，記述されたデータを解釈する理論的側面があるが，記述は常に一定の視点のもとになされるものであり，その視点こそが理論を構築する母体となるものである。したがって，いかなる意味においても理論と独立した純粋に記述的な研究というのは存在しないといってよい。さて，発展的な議論は通常視点を共有し，共通の了解のもとに組み上げられていくものであるから，いつの時代にもその時代にある程度支配的な理論的傾向ができあがっていく。こうして言語学の流れをその時代に支配的な理論という側面からたどって行くなら，おおむね，19世紀の比較言語学，ソシュールにはじまる構造主義言語学，チョムスキーによる生成文法の言語学，というように大まかな発展の歴史を描くことができる。そして，おそらく現在は生成文法に続くものとして，認知言語学が確立されようとしている時代であると位置づけることができるのではないだろうか。これはもちろん認知言語学が生成文法より優れているという意味でもなければ，それにとって代わるという意味でもない。ただ，単に新しい言語学の潮流が生まれようとしているというだけである。そもそも構造主義の時代でも（そして現在も）比較言語学(的)研究は続けられてきたし，生成文法の時代でも構造主義的研究はなされていたのである。それと同じようにこれから

も生成文法的研究はなされ続けていくであろう。おもしろいのは構造主義言語学が比較言語学の伝統のなかから生まれ，かつその比較言語学に対するアンチテーゼをもっていたように，生成文法も構造主義の伝統から生まれ，構造主義にたいするアンチテーゼをもっていた。そして今また認知言語学は，ある意味では生成文法の伝統のなかから生まれ，かつまた生成文法に対するアンチテーゼをも持っていることである。

認知言語学(cognitive language)という名称は，認知科学(cognitive science)からきている。これは1970年代から盛んに唱えられるようになった人間の知に対する学際的研究をおこなう学問分野で，心理学，言語学，哲学，計算機科学，大脳生理学などの研究者らが構想したものである。これらの研究者らの共通の問題意識は「人間は外界をどのように認識し，どのように思考しているのか」という問題である。とくにコンピュータの発達は，人間の思考とコンピュータの計算との性質の比較，などに関する関心を増大させることになった。言語は人間が五感によってとらえたもの，思考した内容を他者に理解しえるように記号化したものであるから，認知科学の重要な一端を担っている。この意味では言語学は生成文法等もふくめておしなべて認知科学であり，言語学すべてが認知言語学である，といってよい。事実，チョムスキーの研究は認知の仕組みそのものに対する洞察をふくんでおり，認知科学の一端としての言語学という意識は生成文法においてむしろ顕著である。

ところが，現在一般に認知言語学の名称には反生成理論の意味あいが強くつきまとう。これは，認知科学が市民権を得ると多くの言語学者が競って，「認知」という言葉を使いはじめたが，その代表がレイコフとラネカーであったことによる。彼らはいずれも生成文法の土壌のなかで育ったのだが，生成意味論などを通して主流派との論争に破れ，理論構築に失敗したという歴史をもつ。その彼らが生成の枠組みを離れ，全く別な理論的背景をもって生成に対抗したのが「認知」だったのである。現在は生成文法的研究に行きづまりを感じ，そこから離れていった研究者で，何らかの形でレイコフやラネカーらの研究と接点を持つ研究者らが進んでこの言葉を用い，自らの研究を認知言語学と称する場合が多い。したがって，認知言語学はさまざまな言語

研究の雑多な集まりであり，生成文法のようにその研究者間で了解済みの確固とした体系があるわけではない。とはいえ，共通の名称はひとりでに研究の性格を似通ったものに規定していく働きをもつから，以下，認知言語学者の間でおおむね共通している基本的な思想を紹介してみよう。

2．認知言語学の特徴

前項で述べたような雑多な性格を持つ認知言語学の研究に，共通のものを探してあえて認知言語学を定義するなら，「人間の認識，認知の仕組みを考慮に入れて言語現象を扱う言語学」ということになると思われる。しかし，どのように人間の認知能力の問題を理論に反映させているのか，また認知能力を考慮の外におく言語理論などありえるのか，と反問されればそれに正しく答えることは容易ではない。まず「認知の仕組み」という漠然とした言い方のイメージをとらえてもらうために，分析哲学的意味論と対比して認知言語学をとらえる試みをおこなってみたい。

いま，外界の現実をR，言語形式をEと表記することにしよう。EはRと対応関係を持つのだが，RをE化するにあたって，人間にはRを認知する認知のレベルCが必ず介在する。またEを解釈する場合にも，Cレベルで構築されている外界認知の枠組みを必ず参照する。これをフォコニエは次のように表現する。

(1)　E ―――――――→ C ―――――――→ R
　　言語表現　　レベルCでの構築　　現実や形而上学的世界

フォコニエの重要なテーゼは「言語形式は，内的構造を持つ互いに結合された領域を構築するための（不完全で不十分にしか規定されていない）指令である」というものであり，EがCを介さずに直接Rと結びつくことはない，という主張なのである。そして，この中間段階のCレベルで何が構築され，それがどのようにEとRを結びつけるのか，というのが彼の主要な研究テーマとなっている。具体的な例とともに考えてみよう。

(2)　1960年，首相は学生だった。

この文は，文法的に何の問題もない正しい日本語だが，この文はRを一様の仕方で描いているわけではない。たとえば

(3)　1960年，現在の首相である橋本龍太郎氏は学生だった。

という通常の意味解釈の他に

(4)　1960年，当時の首相岸信介氏は学生だった。

という読みもできなくはない。(3)と(4)は明らかに異なったことを言っている（すなわち，真理条件が異なる）。ということは(2)は，(3)の現実を記述するためには不完全な指令しか与えておらず，Cレベルにおける何らかの働きが(4)などの読みを押さえて，(3)の読みを聞き手に選択させるということになる。レベルCにおける「内的構造を持つ互いに結合された領域」のことをフォコニエは(メンタル)スペースとよぶ。くわしい定義は省略するが，(2)を解釈するのに現在の状況と1960年の状況とが問題になっていることは直感的に理解できるであろう。そのそれぞれの状況を現在スペース，1960年スペースと名付け，それぞれ記号でS_1，S_2と書くことにしよう。筆者がこの文章を書いている現在，日本の首相は橋本龍太郎氏である。よって，「首相」という単語はS_1では橋本龍太郎氏を指示する。この同じ単語はS_2では岸信介氏を指示するから，「首相」という名詞はスペースによって指示する値が変化する一種の関数である，とみなしてよい。フォコニエは名詞句が指示対象を出力する機能をとらえて，これを役割(関数)とよび，役割が特定のスペースにおかれた時に指示する指示対象を値とよぶ。上の例では「首相」が役割で「橋本龍太郎」が値である。この役割と値をそれぞれf，aとおけば，この関係を数学的に記述することができて

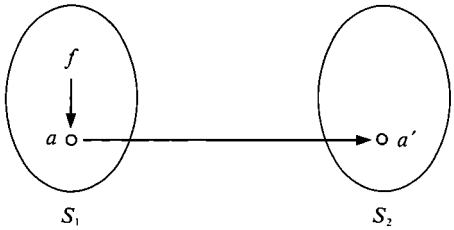
(5)　　$f(S_1)=a$

ということになる。岸信介氏をbとおけば，当然$f(S_2)=b$である。さて，S_2における橋本龍太郎氏は首相という属性を備えていない。したがって，S_1の

要素である a とは完全に同じものではないから，a' としておこう。Cレベルにおいては，S_1 と S_2 が構築され，それらは a と a' によってリンクされている。この関係は(6)のように図示できる。

(3)のように解釈される(2)は，結局「a' が学生である」という主張だが，a' 自体が持ち得ない f という属性を用いて a' が指示できる仕組みは，(7)のような原則として一般化されている。

(6)



(7)　(同定原則) もし二つの対象 a と b とが，語用論的関数によって結合されているならば，a の記述を用いて，a の対応物 b を同定できる。

(6)の場合，役割 f が a を指定する関係ももちろん関数だが，a と a' の対応も，時代(スペース)を越えたアイデンティティーの関係であり，一種の関数である。S_1 においてある人物 x (36歳以上の人間)が選ばれれば，36年前の x が S_2 におけるその対応物 x' として定まるからである。こう考えれば，(6)の a' は(7)における b に相当し，a の記述 f を用いて，a' が同定されるのである。

(7)は，自然言語の解釈にあたって，かなり幅広く用いられている。たとえば，書店の中ではよく店員が

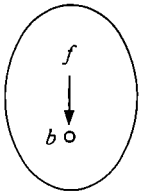
(8)　夏目漱石は奥の棚の上から2番目です。

というような発話をすることがある。作家（a とする）と作家の書いた本（b とする）が語用論的関数で結ばれているがゆえに，(7)に従って，a の記述(作家の名前）によって，b が同定されているのである。

Cレベルにおいては，(6)のような複雑なスペース構成ではなく，(9)のよう

な単純な構成になることもある。いうまでもなく，(4) の解釈がこれであり，「1960 年，首相は日米安保条約を締結した」などという文は通常 (9) のようなスペース構築を元に解釈される。どのような解釈を採用する場合でも，(6) や (9)がＣレベルで構築されるのであり，このレベルを無視して，ＥをＲと直接結びつけることはできない，というのが認知言語学の立場なのである。

(9)



これと正反対の立場に立つのが，分析哲学における言語の扱いである。哲学者達のもっぱらの関心は (1) の図式で言えばＲにある。Ｒから出発してそれを正確に表現するものとしてのみＥを問題にするのである。その途中にあるＣなどは，かりに存在するとしても関心の対象から全くはずれている。できるだけＣの影響を排したＥの表現を強くもとめ，現実の自然言語Ｅが不完全でＣの影響から免れ得ないのならば，Ｃの影響を受けない完全な人工言語（数学で用いる言葉のようなものを想像していただければよい）を考えて，そこにおける論理を問題にしようとする。(2) があいまいなのは，「首相」が「現在の首相」のことなのか「当時の首相」のことなのか，明記されていない不完全な言語使用にその原因があり，はっきりと明示すれば，単純な (9) の図式で処理できるので，Ｃの影響などと無関係な言語の論理を問題にしようとするのである。

要するに，言語学と哲学では同じように言語をあつかいながら，言語そのものに関心の中心があるのか言語が表現する論理に関心の中心があるのか，という違いがあるのだが，時に，分析哲学者の論法が認知言語学的立場からみて容認できないことがある。固有名詞，たとえば「アリストテレス」に意味があるのか，という問いは哲学の分野で古くから議論がなされたきた。代表的なものがミルの無意味説と，フレーゲとラッセルの対象属性説である。

前者は固有名詞は単なる符丁にすぎず，意味はなく対象（アリストテレスの場合は現存した哲学者）を直接指示する記号である，という主張であり，後者は「プラトンの弟子で，ニコマコス倫理学の著者でアレクサンダー大王の家庭教師云々」というのが「アリストテレス」という単語の意味なのだという主張である。直感的には前者が正しいように感じられるが，それを証明するのはやさしくない。現代を代表する分析哲学者のクリプキは以下のような論法で有意味説を退け，無意味説を後押しする。次の二つの文を比べてみよう。

(10)　アリストテレスは犬好きだった。
(11)　ニコマコス倫理学の著者は犬好きだった。

もし，「ニコマコス倫理学の著者」がアリストテレスの意味（の一部）だとすると，(10) と (11) は全く同じことを言っていることになる。つまり，(10)と(11)の真理条件は等しい。ところが，今かりに「ニコマコス倫理学」はアリストテレスではなくプラトンが書いたことが判明したとしよう。このような状況は決してあり得ないことではない。このように仮定的に想定し得る状況を哲学では可能世界とよぶ。この世界の中で (11) が真になるのはプラトンが犬好きであったという場合に限られる。が (10) はそのような可能世界の中にあってもアリストテレスが犬好きの場合にのみ真なのであり，(11) とは明らかに異なった意味内容を表明しているのである。ということは「アリストテレス」の意味が「ニコマコス倫理学の著者」ではないことを示している。

この論法は一見したところ完全なように思われる。(1) の図式に今の論法を当てはめていくと，Eの位置に固有名「アリストテレス」という言語表現 f があり，Rの位置に現実あるいは可能世界が存在する。ここで実在したアリストテレスを a とすると，a もRの位置にあり，f はCレベルの影響を全く受けることなく，a を直接指示する。「プラトンの弟子で，ニコマコス倫理学の著者で云々」という a の属性はCレベルで a に付加された情報であり，記号の指示に何の影響も与えない。したがって f の意味などではあり得ない，ということになるだろう。

しかし，認知言語学の立場からすればこの論法は大いに問題がある。まず，

可能世界であるが，これはRのレベルにあるのではなく，Cのレベルで構築される一つのスペースに他ならない，またこの点に関しては私たちが真実そうであったと思っている現実についても言えることである。ということは，(10) を特殊な可能世界の中で解釈しようとしたときも，(2) を解釈したときと同じ (6) のようなスペースがCレベルで構築されていると考えることが可能である。この時 S_1 は現実世界スペース，S_2 はニコマコス倫理学の著者がプラトンであった，という可能世界である。さて，S_2 におかれたアリストテレスは S_1 における a と，少なくとも属性「ニコマコス倫理学の著者」の保持に関してことなっているのだから a' とおくことが許されよう。とすれば，a と a' がアイデンティティーによってリンクされており，(6) の図式をそのまま適応することが可能になる。この時固有名 f は確かに a' を指示するが，これは (6) の図式通り，(7) の同定原則に従った指示なのだと言ってよい。要するに (2) において「首相」が橋本龍太郎氏を指すのと，アリストテレスがニコマコス倫理学の著者でないという可能世界で「アリストテレス」という固有名詞がなおアリストテレスを指す場合には，全く同じ同定原則がCレベルで働いていると考えられるのである。さて，(2) について「首相」の意味は内閣総理大臣であるが，1960 年の橋本龍太郎氏は内閣総理大臣ではない，にもかかわらず「首相」という単語はこの時の橋本龍太郎氏を指示できる。ゆえに，内閣総理大臣という意味は「首相」の意味（の一部）ではない，というような論理は成立しないであろう。これは (10) についても同じことで，可能世界がCレベルで構築されるスペースであるとするなら，「ニコマコス倫理学の著者」がアリストテレスの意味の一部ではないということはクリプキーの論法では証明できない。

さらに，クリプキーの論法の中には認知言語学的観点からみて認めることのできない前提がもう一つ含まれている。それは a がカテゴリー f の成員であるならば，a は f の意味（定義）とみなされる属性を必ず備えていなければならない，という考え方である。数学で用いられるようなカテゴリーの場合はこれで全く問題はない。「素数」の意味（定義）とは，「1 とその数しか約数を持たない自然数」というものであり，11 はこの定義にあてはまるから素数

なのであるが，21は3や7という約数を持ち，この定義にあてはまらないから素数ではないのである。ところが，自然言語のカテゴリーはそんなに単純にはできていない。たとえば，「にわとり(鶏)」という単語を手持ちの辞書(『新解国語辞典』小学館)でひいてみると，「キジ科の飼い鳥。卵や肉は食用。観賞用のものもある。」とある。一般に辞書とはコトバの定義，意味を記載しているもの，とされているから，これを「にわとり」の意味としてみよう。さて，野生の鶏，人間に飼われる以前の原始時代に存在していた鶏，はこの定義にあてはまらないから，にわとりではなくなるのだろうか。おそらくそんなことはないであろう。いや，それはこの辞書の定義が一般用の不完全なものだからであって，動物学的にはきちんとした定義が存在するはずである，という声が聞こえてきそうだが，かりにそのようなものが存在するにせよ，「鶏」という言葉を用いる一般人はそれを知らない。そもそも「花」にしても「鳥」にしても，その成員のすべてが共通に備えいてる属性など存在しているのであろうか。おそらく存在しない。つまり，自然言語で使われる多くの単語の意味は，学術用語の定義のように，決して必要十分条件として存在しているのではない。では，どうなっているのか，私たちはカテゴリーをどのように認識しているのか，この問いがレイコフの認知意味論の出発点になっている。

レイコフのカテゴリーを扱った部分の意味論を特にプロトタイプ意味論，と呼ぶことがある。カテゴリーは，そこに属する成員が共通に持つ属性によって特徴づけられるのではなく，その中心に，カテゴリーを代表するような典型的な成員があって，あとはその成員とどれだけ類似点をもつかに従って，帰属の度合いが定まる階層的な構造になっている，とするものである。たとえば，「鳥」というカテゴリーの中心には「鳩」や「つばめ」や「すずめ」などがいて，これらは問題なくそのカテゴリーの中心的メンバーであるが，「ペンギン」「キューイ」「駝鳥」なども，中心的な成員と類似点をもつから，このカテゴリーの成員とみなされるが，周辺的な成員である。さらに，鳥の場合は「ペンギン」などは周辺的な成員であってもカテゴリーへの帰属については全く問題はないが，帰属そのものがはっきりしないカテゴリーと成員の関係もある。たとえば，「スポーツ」といえば，だれしも野球やテニスやバレ

ーボールなどを思い浮かべるだろう。これらが中心的な成員，つまりプロトタイプだからである。しかし，ハンググライダー，オリエンテーリング，競馬，ビリヤード，美容体操，となっていくとどうであろうか。スポーツらしくもあるし，そうでないような気もするというのが，通常の反応ではあるまいか。また，時に囲碁や将棋やチェスなどもスポーツに入れる人がいる。これは中心的な成員と「競技」という点で共通点をもっているからである。またスキーは競技ではなく，単にスキー場ですべる場合もスポーツであろうが，これは「競技」という属性はもたなくとも「体を動かす」という属性をプロトタイプと共有しているからである，というような議論になる。カテゴリーの構造，さらにプロトタイプとは何か，カテゴリーの属性に中心的な属性があるのか否か，といった問題が認知意味論の中で盛んに議論されている。

レイコフがプロトタイプ意味論を大々的に展開していったのは主著 *Women, Fire, and Dangerous Things*（邦訳名『認知意味論』）においてであるが，この中では心理学者の論文がたびたび引用され，この考え方が心理学の世界でまず唱えられ出したことがわかる。レイコフにとって，言語学は心理学と切っても切れない関係をもつ。人間の思考する能力，言語記号を操作する能力は，人間の身体的・生理的条件と無関係に存在することはありえず，言語は哲学者が想定しているような純粋に客観的な記号操作ではありえない，という考え方が根底にあるからである。彼は，言語現象の説明として「認知モデル」と呼ぶものを呈示するが，このモデルは人間の外界把握モデルであり，言語学内部の仮説にとどまるものではない。

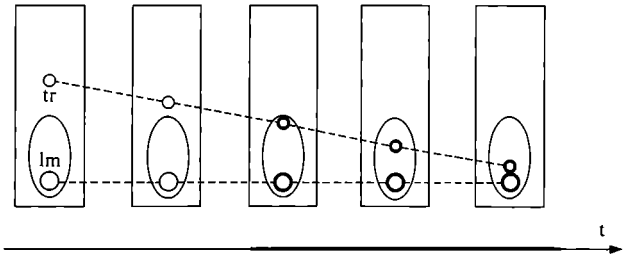
たとえば，「容器のスキーマ」という認知モデルがある。スキーマというのは，さまざまな形で実現する抽象的な意味構造のことをいい，大体は具体的で身体的な経験にもとづいて構築されるものである。容器のスキーマの場合も私たちが自分の体を容器として経験しているという感じ方が根底にある。容器は内部と外部そして境界が存在し，その中に入ったり出たりすることができる。このスキーマを用いた言語表現は，多くの言語に頻繁に見られる。日本語でも英語でも，ある対象が見えてくることを「視界に入ってくる」(come into sight) という言い方をするし，怒ってかんかんになっているこ

とを「怒りにあふれていた」(she was brimming with rage.) という言い方をする。ということは個別言語の違いを越えて，このスキーマが人間の外界把握の一つの基本的あり方なのではないかということを示唆し，言語の領域を越えた仮説にまで発展するのである。言語学内部における成果としては，スキーマという考え方によって多義語の意味の連関を呈示したり，メタファーやメトニミーといった修辞的言語表現の分析も可能になったということがあげられる。

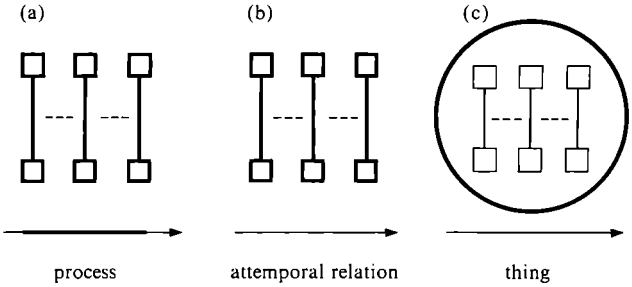
レイコフの関心はこんなふうに，言葉の形式的な側面よりも意味的な側面により多く注がれているが，この傾向は認知言語学のもう一つの柱であるラネカーにも見られる。ラネカーの言語学の特徴は形態論的あるいは統語的な性質をも意味論的なモデルに還元して，意味の構造に言語形式の最終的な根拠を求めようとするところにあると思われる。

たとえば主語，動詞，目的語からなる一つの文（たとえば The boy arrived at the station.）を考えてみよう。主語におかれる要素（the boy）は表現されようとしている一つの事態の中で時間とともにある軌道を描く対象であるから，トラジェクター（trajecter ; tr と略）と呼ばれ，主語以外の要素（station）はトラジェクターの位置を決める基準として働くものであるからランドマーク（landmark ; lm と略）と呼ばれる。さて，動詞が描くのはプロセスであり，これはランドマークとトラジェクターの関係の時間的な変化のことである。「到着する」(arrive) という事態は tr と lm を用いて (12) のように図式化できる。図中で lm の回りにある中位の円は話し手の視界に入る領域を示している。今の場合 the boy が tr であり，the station が lm であるが，もともと離れていた tr が，時間の経過によって lm の位置に達するプロセスの中で特に最後の局面にスポットライトをあてたのが arrive という動詞が表現している内容である。言語表現は一般に，表現される対象の全体から必ずある部分を取り上げて，そこにスポットライトを浴びせるような意味構造になっている。このように事態のうちで言語表現によって一部が浮かびあがることをプロファイル（profile）とラネカーは呼ぶ。図では太線で示されている部分である。同じ一つの事態でも arrive（到着する—動詞），arriving（到着しつつある—分詞

(12)



(13)



すなわち形容詞)，arrival (到着—名詞) のようにさまざまな品詞で表現されうるが，それはそれぞれプロファイルされる部分が違うのである。(13) は品詞の違いに応じたプロファイルされる部分の違いをより抽象的な形で図示したものである。(a) は動詞で，時間も主要構成素(トラジェクターとランドマーク)間の関係もプロファイルされている。(b) は形容詞，副詞または前置詞で，主要構成素間の関係だけがプロファイルされている。(c) は名詞で事態全体を一まとまりの固まりととらえ，その全体がプロファイルされている。要するにラネカーはこのような形で，「主語，目的語」のような統語範疇や「名詞，動詞，形容詞」といった形態範疇を意味構造に還元したのである。ラネカーは (12) や (13) のような図を多用するが，これは抽象的な意味構造を一般化するために，この種の図式的な把握が不可欠であることを示している。

3．生成文法理論との対立点

認知言語学は生成文法に対するアンチテーゼの意味あいがあるが，生成文法との一番大きな違いは，言語現象を説明する最終的な根拠を意味的な認知モデルに求めるか，統語構造に求めるかにあると思われる。生成派が統語構造を重視するのは，統語論の自律性のテーゼを背後に抱えているからである。いまや古典的なチョムスキーの例文 Colorless green idea sleeps furiously.（色のない緑の思想が激しく眠る）は，意味はないが文法的に正しい文としてあげられたものであった。つまり意味とは独立した統語規則が存在する，それは人間の生得的な能力の一部であり，人間の生理的な条件からも独立している，という主張である。たとえば，The boy that the girl loves loves music. という英語の文を生成する統語規則はこの the girl の位置に名詞句がおかれることを要求しているだけであろう。そこで the girl の代わりに the girl that her teacher loves という名詞句に置き換えることもできて，最初の文は The boy that the girl that her teacher loves loves loves music. となるが，これも言語能力が正しく生成する英語の文の一つであるはずである。もちろん，現実にはこの文は解釈不能かきわめて困難であり，英語話者は許容しない。しかしそれは「言語能力」を現実に適応する「言語運用」(performance) のレベルで人間の記憶の容量など生理的条件が加わるためであるにすぎない。そこで，「言語運用」の影響を完全に排除した「言語能力」(competence) の解明が生成文法の最終目標となっている。

ただ問題は，第一次資料として用いれるネイティブスピーカーの直感は意味的要素や言語運用の影響を受けているはずなのに，それをすべて言語能力に帰着してしまうことにある。実際，現在の生成理論では複雑な言語現象を説明するため，想定されている統語構造も実に複雑なものになっている。初期の樹形図など，誰がみても素直に納得できるものであったのに，いまや最も単純な単文でさえ，素人には想像もつかない構造が仮定されている。認知派には，そのように何もかもを統語構造に帰着させることが人間の認知能力

を全く無視しているように写ってしまう。認知派にとっては「言語運用」こそ言語のありのままの姿であって，その背後に機械的に存在しているとされる「言語能力」などは存在しない。あるのは経験に基づく認知モデルなのである。

この認知派の生成批判はある程度妥当なものを含んでいるが，では認知理論がいかなる言語現象を説明したのかとなるといささか心もとない。認知言語学の書物を読むと，書かれいてる内容は理解できるし，直感にも合致している。だがその結果，どんなことが言えて何がわかるのか，と問いかけたい気持ちが常に残ってしまう。メタファーや換喩にしてもそれを理論としてとりあげる重要性は理解できるが，私たちが直感的に理解できる仕組み以上のものは語っていないように思う。結局のところ，認知言語学はこれから将来にかけて真価が問われる，まだ揺籃期にある言語理論であると言えるだろう。

参考文献

(1)　山梨正明『認知文法論』ひつじ書房，1995。
日本語で読めるもっとも手近な参考書。認知言語学の全体像を摑むのに役立つ。ただ，個々のテーマをじっくり掘り下げてみたい人には向かない。

(2)　河上誓作（編著）『認知言語学の基礎』研究社，1996。
基本的な概念が丁寧に説明され，入門書として最適である。

(3)　テイラー『認知言語学のための14章』（辻幸夫訳）紀伊国屋書店，1996。
章の構成がすばらしく，よくまとまった入門書である。

(4)　レイコフ『認知意味論』（池上嘉彦，河上誓作他訳）紀伊国屋書店，1993。
G. Lakoff の *Women, Fire, and Dangerous Things* の翻訳。認知言語学の出発点ともいえる歴史的著作。

(5)　フォコニエ（坂原他訳）『メンタルスペース』白水社，1987。
「メンタルスペース」理論の出発点になった著作。1996年に改訂版。認知言語学の中ではやや周辺的な位置にあるが，理論の説明能力は最も高いと思われる。

(6)　Langacker, R., *Foundations of Cognitive Grammar,* vol. 1, vol. 2, Stanford University Press (vol. 1, 1987, vol. 2, 1991)
レイコフと並ぶ認知言語学の中心をなす著作だが，残念ながら邦訳はない。しかし，本格的に認知言語学を学ぶためには不可欠である。